



Data

監督・脚本: トーマス・ベズーチャ
原作: ラリー・ワトソン『Let Him Go』
出演: ダイアン・レイン/ケビン・コスナー/レスリー・マンヴィル/ケイリー・カーター/ウィル・プリテン/ジェフリー・ドノヴァン/ブーバー・スチュワート

👁️👁️ みどころ

米国の良心を代表するようなハリウッドの2人のベテラン俳優が、死亡した息子の嫁と孫の取戻しを巡って、大奮闘！本作の原題は『Let Him Go』だが、なぜ邦題は『すべてが変わった日』に？

本作は西部劇？家族愛の物語？ロードムービー？たしかにそんな雰囲気も強いが、いやいや、何と本作はダーク・スリラーだ。後半からの不穏な雰囲気は一体何？こんなヤバイ会食は真っ平ごめんだが、そんな席での交渉の決裂ぶりに注目！

“ネタバレ厳禁”のクライマックスに見る大活劇(?)と大惨事はかなり怖いよ。それも、あなた自身の目でしっかりと！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■原題は『Let Him Go』。しかし、邦題は？その是非は？■□■

本作は1947年にノースダコタ州に生まれたアメリカの小説家ラリー・ワトソンの原作を映画化したものだが、小説のタイトルも映画の原題も『Let Him Go』。これは命令形だが、本作で“今なお米国のハンサムと知性を代表する俳優”であるケビン・コスナー以上の存在感を見せる女優ダイアン・レインは、インタビューの中で、それを「彼を解放してあげて」と翻訳している。その上で、彼女は「映画の中で、『彼を解放してあげて』と言う言葉を誰も口にすることはないのです。」と述べている。

そんな本作の邦題は、『すべてが変わった日』。たしかに、本作を観終わった後は、ケビン・コスナー扮するジョージ・ブラックリッジの死亡を含めて、たしかにすべてが変わってしまうことは間違いない。しかし、1本の映画を作り、観てもらおうと思う以上、それは当たり前だ。何がどう変わっていくのかがすなわち映画のストーリーの進行だから、『すべてが変わった日』というタイトルはあまり意味をなさないのでは？

本作については、ネット上に面白いネタバレ情報があるが、ここでは「それにしても邦題の『すべてが変わった日』ってものすごくいい加減なタイトルじゃないですか？すべてとか、変わったとかどんだけ抽象的なんだよ。今すぐ考え直してください。」と書かれていた。私はこの意見に賛成だが・・・。

■□■西部劇？家族愛の物語？ロードムービー？それとも？■□■

ジョン・ウェイン主演の西部劇は古き良き時代のハリウッド映画の代表だが、近時はそれと同じような古典的な西部劇は登場しない。しかし、昨年の第93回アカデミー賞で作品賞、監督賞、主演女優賞を受賞した『ノマドランド』（20年）（『シネマ48』24頁）も、広いアメリカ大陸を横断するストーリーだったから、馬をキャンピングカーに変えた現代版の西部劇かも？そう考えると、本作の時代は1963年だが、モンタナ州で愛妻のマーガレット・ブラックリッジ（ダイアン・レイン）や愛車の1958年製シボレー・ステーションワゴンとともに、馬を育てながら牧場を経営しているジョージの姿を見ると、本作も西部劇？ケビン・コスナーの代表作である『JFK』（91年）は既に30年前の映画だが、本作を観ていると、彼がシボレーを運転する姿も馬を操る姿も立派な絵になっているからさすが。また、西部劇では、かつての三船敏郎や彼のコマーシャルのように「男は黙って・・・」がよく似合うから、そんな演出がピッタリ決まっている彼を見ていると、まさに本作は西部劇だ。

他方、本作導入部では①息子ジェームズの不慮の死、②ジェームズの妻ローナ（ケイリー・カーター）とドニー・ウィーボーイ（ウィル・ブリテン）との再婚、③マーガレットによる、ドニーがローナと孫のジミーに加えている虐待の目撃、などのストーリーが描かれるが、これらは本筋に向けてどんな伏線になるの？それが興味深い。それに続いてマーガレットが手作りのケーキを手土産に、ローナたちの住む家を訪れると、アレレ、この家族はジョージとマーガレットに何も言わずに引っ越してしまっただけ。それは一体なぜ？

ドニーの実家はノースダコタ州にあるらしいが、ここではじめてアレレと思ったのは、ローナは幼い息子ジミーを連れ子にしたままドニーと再婚したものの、その結婚式のシーンにドニーの家族の姿が誰1人見えなかったことだ。しかも、マーガレットがノースダコタ州に向かい、ローナとジミーを取り戻すという決意をジョージに打ち明けるシークエンスを見ていると、ローナがドニーと再婚するについて、ドニーの両親やその家族と全く顔合わせをしていないようだから、アレレ、そんな再婚ってあるの？ジョージとマーガレットにとってローナは死んだ息子ジェームズの妻だが、その幼子ジミーはジョージとマーガレットの血を引いたたった1人の孫だから、ローナの再婚相手の選定に無関心であったはずはない。それがアレレと思う点だが、原作も本作もそれは意識的にやっているらしい。マーガレットの決断や仕方なくそれに同意するジョージの姿を見ていると、本作は家族愛の物語？また、ジョージとマーガレットが愛車に乗って一路モンタナ州からノースダコタ

州に向かう中盤のストーリーを見ていると、本作はロードムービー？いやいや、さにあらず、本作はダークスリラーなのだ。

■□■不穏な雰囲気は？妻の決断は？夫の賛否は？なぜ銃を？■□■

本作は極端にセリフを省いた序盤のスクリーン上で、ジョージとマーガレットがローナとジミーを取り戻すために、モンタナ州の牧場からノースダコタ州のウィーボーイ家まで愛車に乗って赴くストーリーが描かれる。しかし、考えてみれば、この2人とウィーボーイ家は親戚なのだから、結婚式で同席していなくても、1度や2度は挨拶をしているはず。そう考えるのが当然だが、スクリーン上を見ていると、どうもジョージとマーガレットはウィーボーイ家について何も知らないらしい。そんなバカな？そんな状況下で、ローナはドニーと再婚したの？

他方、マーガレットは自分の目撃情報を根拠に、ドニーはローナとジミーを虐待していると思ひ込み、そのため、とりわけ孫のジミーの取戻しを主張しているが、そもそもそれって当然のこと？弁護士私の目には夫のジョージが言うように、それは法的には難しいことは当然。だって、幼いジミーの親権者は母親のローナだし、そのローナは夫のドニーと共にノースダコタ州に住んでいるのだから、少なくともドニーの同意がない限り、ジミーをジョージとマーガレットが取り戻すことは不可能だ。もちろん、その程度の理屈はマーガレットもわかっているはずだが、彼女の決意は固いようだ。ジョージとマーガレットは長年連れ添った夫婦で、今なお互いの愛情は冷めていないようだが、見ている限り、常に妻が暴走気味で、夫はプレーキ役だ。妻の決断どおりの結論に導くためのマーガレットの決めゼリフはある意味ズルいものだが、今回も結局ジョージはマーガレットの“決断”に従って車のハンドルを握ることに。そこでビックリしたのは、運転席の下にマーガレットが拳銃を隠していたこと。しかも、実弾を装填したままだ。これは一体何？マーガレットは一体どこまで、何を決断しているの？

■□■原住民青年との遭遇は？心温まるエピソードの意味は？■□■

モンタナ州とノースダコタ州は両者ともアメリカ大陸の最北部の中央にあり、左右（西東）に並んでいる。しかし、アメリカ大陸は大きいから、その距離はいかほど？それはともかく、本作中盤では、『ノマドランド』と同じように、しばらくアメリカ大陸のロードムービーを楽しみたい。そこではいきなり、車泥棒と見間違ふような事件に遭遇するので、それに注目！しばしの休憩での夫婦の語らいを終え、停めていた車に戻ると、そこには馬に乗った若い男がいたから、ジョージとマーガレットはビックリ！この若い男は何者？そして、車に何をしようとしていたの？

一見、車泥棒に思えたこのネイティブ・アメリカンの青年ピーター（ブーバー・スチュワート）は、近くのもので1人静かな生活を送っているらしい。1963年に設定されている本作で、こんな青年のこんな生活が登場してきたことにビックリ。だって、一方でケネディ大統領暗殺でアメリカ中が大混乱に陥っている1963年の時代に、他方でノースダ

コタ州の山の中ではこんな生活もあったの？「孫ジミーとその母親ローナを何としても取り戻すのだ」と意気込んでいたジョージとマーガレットは、ここでしばしの休息をとり、人間らしい温かい触れ合いを実感することができたが、本作中盤のこのエピソードは一体どんな意味が？それは、ダークスリラー色満開になる、本作ラストのあつと驚くクライマックスの中でははっきり見えてくるので、それまでしっかりと胸の中にしまっておきたい。

■□■こんな会食は真っ平ごめん！孫を抱いた時間は？■□■

結婚は個人×個人の結びつきだが、同時に家と家との結びつきでもある。それに伴う「氏の変更」等々を含めて、各国の近代の婚姻制度はさまざまだが、結婚によってそれまで何の縁もなかった2つの家が結びつくことは間違いない。したがって、その両家の人々が集った会食はさまざまな情報交換の場として大切なものだが、本作中盤に見るウィーボーイ家での会食は最悪。こんなに印象の悪い、雰囲気の良い、したがって、ワインにも料理にも一切手を付けられない、さらに、ウィーボーイ家の女家長ブランチ（レスリー・マンヴィル）が一方向的に仕切る会食は珍しい。

ウィーボーイ家には数人の息子がおり、ドニーはその1人だが、ウィーボーイ家の男の子たちはすべてブランチに絶対的服従するのが当然らしい。テーブルに座った息子たちが料理に手を付け、ブランチが演説を繰り返している途中、ドニーとジミーを抱いているローナが戻ってきたから、ジョージとマーガレットはひと安心。そこでやっと久しぶりに孫との“ご対面”を果たしたマーガレットは、しばしジミーを腕に抱いていたが、ブランチの教育方針によれば、ジミーは直ちにベッドルームに行かなければならないらしい。すると、マーガレットがジミーを抱いていた時間はわずか数分だけだ。そんなバカな！

かなり不穏な雰囲気が漂う中、ジョージとマーガレットはウィーボーイ家の面々と別れを告げて愛車に乗り込み、宿泊先のモーテルに向かったが、さあそこでジョージとマーガレットはいかなる決断を？

■□■ネタバレ厳禁の大活劇(?)はあなた自身の目で!■□■

1960年代後半は、クリント・イーストウッド主演のマカロニウェスタンの登場に全世界が驚かされた。それまでの正統派西部劇と違い、マカロニウェスタタンでは“復讐色”や“残虐色”が目立っていたためだ。しかし、『続・荒野の用心棒』（66年）では、敵に捕えられたクリント・イーストウッド扮するガンマンが両手を粉々に砕かれて、自慢の拳銃の腕前を封じられてしまうシークエンスが登場していた。これでは、もはや復讐は不可能。誰もがそう思った後の、あつと驚く“火事場の馬鹿力”的なクライマックスが圧巻の見せ場だった。

本作では、ちょっと押しが強すぎる感のあるマーガレットと、それにブレーキをかけながら、結局マーガレットに従ってしまう“善意の代表”のようなジョージの対比が面白いが、それ以上に印象に残るのが、“悪の権化”のような圧倒的な存在感を示す女家長のブランチだ。ジョージとマーガレットは、孫のジミーと嫁のローナを取り戻すというもともと

無理な要求をぶつけ、敵地で、しかもたくさんのブランチの息子たちに取り囲まれた中の交渉でそれを実現しようとしたが、それが到底不可能なことは、スクリーン上を見ていると明かだ。その結果、マーガレットがわずかに数分だけジミーを腕に抱いたという成果のみで、すごすごとウィーボーイ家を後に、モーテルに戻ったわけだが、本作はそこで“交渉打ち切り”にならず、両者の対決はよりエスカレートしていくので、それに注目！

ジョージは元保安官だから、ライフルも拳銃も使えるのは当然だが、シボレーの中に隠していた拳銃が陽の目を見るのは、いつ、どんな場面で？また、それは効果的に使えるの？いや、きっとそうではないだろう。そう思っていると、案の定、スクリーン上では、クリント・イーストウッド扮するガンマンの両手が粉々に砕かれたのと同じような残忍なシークエンスが登場するので、それに注目！それによって、ウィーボーイ家の真の恐さをジョージとマーガレットは思い知らされたわけだが、本作の更にあつと驚くクライマックスはどうなっていくの？そんな、“ネタバレ厳禁”の本作クライマックスの大活劇(?)をここに書くワケにはいかないなので、それはあなた自身の目でしっかりと！

それにしても、弁護士の私目で見れば、もともと無理筋の“親権を巡る紛争”がここまでのダークミステリーになったり、ここまでのラストの大活劇(?)と大惨事になるうとは……。そう考えると、必ずしも『すべてが変わった日』という邦題も悪くはないのかも……。

2021 (令和3) 年8月13日記